

水城跡

水城は、664年に築かれた長さ1.2キロ、幅80メートルの防衛のための土塁である。朝廷は、中国唐王朝（618-907）の侵略の脅威から太宰府地方、ひいては九州全域を守るために水城の建設を命じた。この巨大な土塁は、博多湾の南にある山の稜線を結ぶように築かれ、さらに南に広がる広大な平野を閉ざした。水城の土塁は高さ10メートルほどであった。湾に面した堤防の手前には、当時の弓矢の射程を超える幅60メートルの濠があった。

663年、日本と朝鮮王朝百済（～660年）の残党は、中国の唐や同じく朝鮮王朝の新羅（～935年）に壊滅的な軍事的敗北を喫した。この敗戦を受けて、朝廷は外国船が最も上陸しやすいと思われた博多湾の南に大規模な要塞を築かせた。この一連の防衛インフラ整備で、665年に平野を見下ろす戦略的な峰に2つの山城が築かれた。大野城、基肄城である。

水城は朝鮮半島から伝わった技術で築かれた。地下水と、堤防敷地の中央を流れる御笠川などの河川によってあたりは湿地帯になっていた。このため、堤の基礎部分は、しっかりと支えることができない柔らかく湛水した土の上に置かれることになる。しかし、古代の建設者には解決策があった。最下層の土に木の葉や枝を埋め尽くすことで、土塁が沈むのを防いだのだ。安定した基盤ができると、埋め立てる部分の周囲に木の枠を設けた。この木板が中に溜められた土砂を留め、層ごとに踏み固めた。各層は、次の層が追加される前にしっかりと詰められた。

壁の土台部には、木製の暗渠が設置された。城の南側には、周囲からの水を分水して一連の人工池を作った。水は池から暗渠を通して巨大な堤防の下に流れ込み、濠に注いでいた。この巧みな水を利用した防衛方法が、「水城」の名前の由来となった。要塞には東と西に 2 つの門があった。東の門は発掘されていないが、西の門の両側の城壁は特に強固で、土ではなく石のブロックで造られていた。

大陸からの侵略はなかったが、水城はその後、友好外交の役割を果たした。8 世紀初頭には、南に太宰府が建設され、水城はその北壁として機能した。外国の要人は東の帝都へと向かう前に太宰府を訪れ、水城の西門から太宰府に入った。したがって、太宰府に流入する外交、輸入品、文化は全てこの門から入り、全国各地へと行ったことになる。こうして水城は文字通り日本の玄関口となり、その役割は防衛的な役割が終わった後も長らく 8 世紀末まで続いた。しかし、港や海上貿易の重要性が増すにつれて、そうした外交や交易といった活動の中心は、北の博多湾へと移っていった。

現代の道路や線路によって分断されている部分もあるが、この古代の堡壘の多くは今も残っている。いくつかの地域の公園では間近に見学することができるほか、天拝山や四王寺山の展望台からは長い並木のラインの見た目で確認できる。